覚え書き

有坂 広一

檀一雄夫妻

二十代の後半から三十代にかけて、石神井公園南田中町に住んでいた。公園に散歩に行く際、しばしば檀一雄の家の前を通った。細長い感じのしゃれた建物である。しかし肝心のあるじは一度も見かけたことがない。私の狙いはそこにあるのだが、一向に姿を現さない。駅前通りの書店の主人が私に話しかけてきたことがある。

「この頃、檀さんは見ませんね」

「ええ、僕は一度姿を見てみたいですよ」

「海外を放浪しているのかもしれませんよ」

「それはあり得ますね」

「昔はドテラを着て、よくこの辺を歩いていたものですがね」

店の主人は私を文学書生風に捉えていたに違いない。いつだったか、テレビに檀夫妻が出演していて、夫人が苦笑しながら、

「その家に訪ねたら、物干し竿に女性の下着が干してありましてねえ」という話をした。

かたわらで檀一雄が笑いながら聞いていた。そのとき、私は駅周辺で自転車で買物に行く女性を思い浮かべた。彼女こそ檀夫人であることを知った。上品な美しい人である。『火宅の人』の主人公の妻のモデルでもある。余談になるが、当時、初心者向きの同人雑誌に参加していたが、主宰の某もそのテレビを観たのか、こんな話をした。

「檀一雄が、太宰さんは酒を飲むと、いっそ陽気になり、面白おかしい話をして、皆を楽しませたそうだけど、本当かな。違うような気がするな。太宰はそんな人間じゃないよ」

と疑問を呈した。私はピーンと来た。主宰の某は心中した太宰を暗い陰気な性格と見なし、一種の先入観、あるいはステレオタイプ的な認識で捕らえているのだろう。こういう人間をときどき見かけるが、私は甚だしく嫌悪している。

「いや、そうではない」

私は反論して若干の説明をした。太宰はサービス精

神の権化みたいな男だよと。すると某はご存じのように自分は詩を書いていて、小説家のことはよく知らないと言い訳をした。それはいいけれど、彼は何かと古めかしいところがあって、よく陳腐なことを口にした。あのときもそうだった。その同人雑誌に入りたての頃、沖縄料理が売りもののスナックに立ち寄った際、主宰は店のママに私のことを、

「この方は、我々の会で、最も温厚な方です」

と紹介した。

「俺は温厚とか大人しいなんて、言われると、胸糞が悪くなる方だ。人間には、本音と建前があるんだ。それを見分けてものを言ってよ。小説の一つも書こうとしている奴が、温厚であるはずはない」

私は努めて穏やかに言ってやった。それでも彼は全く気がついていない。もっと言ってやらないとおさまらない。私はその日、家に帰るや、主宰宛てに一筆書いた。そしてアメリカの作家チャールズ・ブコウスキーの『ブコウスキーの3ダース』の作品から引用した。

〝みんなが口をそろえて言うように、俺は善人じゃない。善人なんて言葉は俺の辞書にない。俺が敬愛するのは、悪人、アウトローだ、くそ馬鹿野郎だ。きれいに髭をそって、ネクタイを締めた体(てい)のいい仕事をする奴なんて好きじゃない。破滅的な奴が好きだ。歯はへし折られ、心もぼろぼろで、生き方も滅茶苦茶な男が好きだ。そういうやつにひかれる。まったく脅威とバクダンが詰まっている人間だ。下劣な女も好きだ。法律、道徳、宗教、規則はご免だ〟（山西治男訳）

ブコウスキーは私の本心を言い当てていると言えばかなり大袈裟だが、代弁していると思った。返事は来なかった。

私は間もなくして石神井公園から別のアパートに移った。とうとう檀一雄の姿を見かけることはなかった。その代わり夫人のヨソ子さんとは何度もすれ違った。大分たってから新聞にヨソ子さんの訃報記事が出ていた。死因は腸閉塞で享年九十二歳。一面識もないが、他人ではない気がした。

落魄(らくはく)気分の喫茶店

ひところ、神保町にあるミロンガというタンゴの喫茶店に通っていた。書泉グランデの裏通りの辺りにあって、古本屋街をあさって、帰りは必ず立ち寄ってコーヒーを飲んだ。その当時は一時代前のテーブルや椅子が並び、いまだにプレーヤーにレコードだった。回

顧しながら、さらに古めかしい雰囲気を思い出した。ミロンガの前はランボーという店名だった。

私の住んでいる江戸川区に妙見島という小さな島がある。旧江戸川の中州である。私は二十代のころ時々このあたりまで散歩することがあった。かつてここに詩人の草野心平が住んでいた。昭和二十三年頃である。彼は同じ郷里の医者の世話で、二軒長屋のうちの一軒の一間を借りて自炊生活をしていた。胸を悪くしていて、血痰を吐くほどであったが、と言って田舎に帰るわけにはいかない。草野心平自伝によると、次のように語っている。「友達の医者は女と酒の両方ではエネルギーがもたない。まあ酒の方だけならいいだろうと言うんだな。それでしょうがない。神保町のランボーなんかに行って酒を飲んでいたよ」

ランボーに飲みに行っているうちに経営者に百合ちゃん一人では大変だから、手伝ってくれないかと頼まれて時々出かけた。百合ちゃんというのは、後に武田泰淳の夫人になった随筆家の武田百合子のことである。百合子は絶世の美女だったそうで、「彼女が動くと、花が揺れているような感じだった」と山口瞳は書いている。経営者は森谷均という出版業者である。そのせいか第一次戦後派、近代文学系、昭森社系、その他の詩人や作家たちの巣窟になっていた。先の山口瞳は、『男性自身、余計なお世話』の中で、「あの隅で、蒼白い顔でカストリを飲んでいるのは梅崎春生、じっと動かないのが野間宏、今階段から落っこちてきたばかりの屑屋の親方みたいなのが椎名麟三……」などと記している。

戦後の混乱期の作家たちの様子が彷彿としてくる。私が通っていた頃のミロンガも昭和二十年代の名残をとどめ、あたかも現代社会の強風を遮蔽して生き延びてきたようなしっとりした温もりを感じさせた。やがて心平は東京に行くのが不便なので、妙見島を去ることになる。島にいたのはほんの短い期間であった。そして本格的に「歴程」発行に携わる。

私がこの店に通ったのは、音楽を聴くためではないが、しかしいつの間にかタンゴのリズムやメロデイが体に染み込んで好きになった。また知らないうちに落魄趣味のようなものになじんだ。品のいい中年のウエイトレスが二人いたが、客は間違っても口説こうとは思わないだろう。ここはそんなことはご法度だ。中には離れたところから、何やら話をしようとした客がいたが、

「ごめんなさい、私はそういうことには関知しており

ませんので」
　あっさり断られている手合いがいた。六、七年通ったが、経営者が変わり、店の雰囲気もピカピカの別物になったので、行かなくなった。もう落魄を気取るわけにはいかないのだ。うらぶれた気分のままで、まともなことを考えなくても許される雰囲気がいい。つまり、社会の最下位にいる気分にさせてくれる所だ。しかし私の心の居場所が消滅したのでは話にならない。

ガリ版刷りの小説

　押入れを整理していたら、ガリ版刷りの同人雑誌が出てきた。会社の先輩の竹山恒夫の書いた４００字詰めの原稿用紙十数枚ほどの小品である。主人公はストリッパーに母親のイメージを見出して、劇場に通っていた。その中に原っぱに数個の土管が転がっていて、子供時代に潜って遊んだという描写があり、土管は母や女のシンボルだから作品として生きている。主人公「ぼく」は友人と屈折した会話を交わすのだが、モーリャックやフロイトが出てくるのは少々キザで、また余計だろう。純文学が大手をふるっていたころの習作だから珍しくはないが。また、
「今度、ランチを一緒にしないか」
　と誘う場面もあるが、この時代にランチとはなかなかしゃれている。いや眩しいくらいだ。私にはおよそ不似合いでそんな言葉を使ったことはない。今の時代を背景に書き直したら、もっと新鮮になったろう。生意気なことを書いたが、よき先輩の肌触りを感じさせ、竹山さんと会ってみたくなった。

死刑囚は悲しや

　人を殺すことの恐ろしさは、実際は大抵の人にはよく分からないことだろう。メディアを通して知っているくらいで、現場を見たわけではない。むろん当事者になったのでもない。やっぱり他人事でしかない。
　以前に都下の市でレンタル動物の飼育係をしているアルバイト社員が、虎に殺されたという事故があった。殺人を犯した虎は、その日に麻酔銃で薬殺された。動物とはいえ、人を殺せば極刑に処せられるのは仕方がない。人を殺した直後の虎を見たら、一種異様な印象を与えるに違いない。虎と言えば、百獣の王ライオンに次ぐ地位にある。それが殺人を犯したら一挙に転落してしまう。人間の殺人者に置き換えてみたら、その

恐ろしさが分かるだろう。
殺人者は、もうお前なんか人間じゃない……そういう目でしか見られない。では何故そんな大それた行為をするのか。
人は物心つくころから愛や信頼という血の通った人間関係の中で生きている。だが不幸にして、そこから逸脱してしまうこともある。社会的に行き詰って人間的にもダメになり、回りの者も皆去っていく。どんな悪い状況に陥っても、妻や母親は見守ってくれるはずだ。
しかし最後の砦ともいうべき家族も見限ってしまう。こうなったら人間たる者、哀れである。信じる者を一切失った時、人は何でもできる。殺人、自殺、ホームレスに・・・
元消防士のK死刑囚は十年余りの間に八人を殺し、名古屋刑務所に服役中の頃、カトリック信者の主婦と文通し、その数は千通を超えた。その中に次のような記述が見られる。
「悲しいことに私は今も、他人様を信じられないのです。人を信じられないなんて悲しいことです」
恐らくKはかなり早い時から、人を信じることと無縁に過ごしてきたのだろう。親の愛情も恵んでもらえなかったのかもしれない。人と生まれたからには、信頼や愛情なくして何の人生かである。
さて、死刑の判決をくだされたら、どうするか。もちろん、その後も生きていかねばならない。普通に生きることもやっかいだが、死刑囚になったら、もっとやっかいである。三度の食事をし、風呂に入り、夜になったら寝るという生活をするのだが、死の恐怖感を感じるのは免れないだろう。
死刑囚の中には、宗教書や哲学書を読んで、贖罪に勤める者もいる。しかし、中には自堕落に過ごしている者もいる。後者の場合は、食べることや寝ることのみに楽しみを見出し、特に罪の意識や良心の呵責を覚えたりすることもなく毎日げらげら笑いながら、本能的にやり過ごしているという。そして、いつ声がかかるわからないまま、日々を過ごす。刑場に連れていかれる前に、饅頭や酒、たばこが出るのだが、それらは自らお通夜を営むためのお供物である。そんなものが喉に通るのかと思っていたら、やっぱりほとんど口にする者はいないそうである。彼らは死の間際に自分が如何に悲しい存在であることを知るに違いない。これ以上悲しいことはないだろう。

伊藤律の生還

元共産党幹部伊藤律のことは私は子供の頃からその名前を知っている。何しろ神童の名をほしいままにした。旧制中学を開校以来の成績で卒業し、一高に入学したという話は中学の先生から聞いた。試験の答案には、百点満点のところを百五十点や二百点にしないと他の秀才には点がつけられなかったと言われたほどだ。

しかし一高に入学後は間もなく左翼運動に入ったので、試験を一度も受けていない。したがって高校時代は秀才だったかどうかは分からないと同級生の杉浦明平が書いている。伝説的な男だった律のイメージは、年月と共に種々の要素が加わり、私の中でも千変万化した。すなわち小才の効く世渡り上手、切れ者の陰謀家、女たらし、裏切り者・・・等々の虚像と実像が入り乱れた。一体実態はどうなのだろう。もし生きているとしたら、是非真実を知りたいと思っていた。その頃、週刊誌を読んでいたら、十数行の短い記事に伊藤律生存説が報じられていた。よくある話なので私は信じなかったが、やがて、それが事実ということが分かった。

一九八〇年、昭和五十年、中国で生存していることが確認され、さらに近々帰国するという記事が新聞を賑した。マスコミはこぞって熱烈歓迎（当時の言葉）した。私は律の出ている週刊誌は片っ端から買って読んだ。中にはこんな記事もあった。成田飛行場で記者会見をしている姿を見たかつての同士は、「惨めだ」と感想を漏らした。片方の目は義眼で髪の毛はすっかりない。内臓疾患で重い病を背負い、車椅子の人であった。しかし体が不自由ながら、記者の質問には歯切れがよく、往年の名スポークスマンの片鱗を思わせた。惨めなどと決めつけることに反感さえ覚えた。とは言うものの伊藤律は才物過ぎて信用されない面もあったことは確かだ。頭がいいと誰もが言う。だが、「伊藤は頭がいいからね」というのは揶揄される場合が多い。そして何かにつけて歪曲化して語られがちである。マスコミもこの手のコミュニストを称賛することはないが、例外的なケースもある。辺見庸が吉本隆明との対談で次のようなことを述べている。

「今や、共産党もあんまり業が深くなくなっているでしょう。僕は伊藤律と会ったことあるんです。北京で。空港で一番最初にインタビューしまして、僕はあの時、足が震えました。もうほとんどろくに喋れなくなっているんです、耳も聞こえないんです。ただ声だけは凛としている。身体から放射する何かがあったんですね。

魅力的でした。ああいう途方もない指導者、業の深い指導者はもういないんですね。だから、ほとんど昼間の集団、非常にわかりやすい、怖さのない党になりました」『夜と女と毛沢東』

さらにもう一人注目すべき人物がいる。映画監督の篠田正浩。篠田は『スパイ・ゾルゲ』を最終作品として意欲を燃やし完成させた。第二次世界大戦前夜に対日工作を担ったとされるリヒアルト・ゾルゲと協力者の尾崎秀実。ゾルゲはドイツ大使館に食い込んで、ドイツの対ソ作戦はもはや避けられないとスターリンに再三打電し、正確な情報を提供した。だが、スターリンはゾルゲを二重スパイではないかと信用しなかった。やがて中央から疎んじられるようになり、日本の特高の監視下に置かれるようになった。ゾルゲと尾崎は太平洋戦争中に逮捕され、四十四年の十一月に東京拘置所で絞首刑に処せられた。終戦九カ月前のことである。

挫折する運命、死刑にされた人間の運命こそ、常に私の関心を寄せる対象であるという篠田監督は、「ゾルゲはスターリニズムを否定できるほどの批評精神を生めなかった悲哀がここにある、と思う」と述べている。そして人間は様々なウィークポイントを抱えており、映画監督の仕事は、その人間的なウィークポイントを補正していく作業であるとも・・・。

さて、さらにゾルゲ事件と言うと私がもっとも引かれる人物がいる。事件発覚の端緒を提供したとされた伊藤律だ。尾崎秀実と同郷であり、一高の後輩でもある。彼は郷里の期待を一身に担いながら共産主義に目覚め、立身出世よりも運動に参加して革命家としての道を選んだ。スパイ説が崩壊した今、もっと人格的な復権を遂げてもいい。

母親のモトさんは律が帰国する九年前に七十九歳で亡くなっている。そして死の瞬間まで息子のことを口にすることはなかった。母親の気持ちの中には複雑な葛藤があったに違いない。もし律が資本主義社会での立身出世を選んでいたら・・・と肉親なら誰しも思うだろう。一高から東大を経て、中央省庁の官僚になり、ゆくゆくは郷里から選挙に打って出るだろう。やり手の律のことだから自民党の要職を歴任し、大臣のポストくらいは軽くこなせたろう。共産党の現役の頃の律は、実務に優れ、オルガナイザーとしても抜群の能力を発揮し、目を見張るものがあった。三十三歳の若さで、中央委員、政治局員、書記局長、農民部長と要職を兼ね、また徳田書記長の片腕として敏腕をふるった。

しかし彼は権力闘争に敗れた。政治的な敗者である

がゆえに、過去の失敗や疑惑が人々の目にさらされた。だからといってスパイにまで仕立て上げられる謂れはない。あげくは二十九年間も中国で獄中生活を強いられた。日本に帰国して七年後に死去した。時代は大きく変貌を遂げ、ソ連は崩壊し、東西ドイツの壁は撤去された。ロシアも中国も資本主義社会の経済原理を導入して、活路を見出す時代になった。

しかし幸か不幸か伊藤律は死ぬまで日本の革命を信じていた。

何故、「朝鮮の人」なのか

朝鮮人という言い方は、正しいのか間違っているのか、いまだに分からないままで私は口にしたことはない。しかし中には何のこだわりもなく話したり書いたりしている人もいる。かつて私が所属していた同人雑誌の一人は、嫌悪感をもって某は朝鮮人みたいな顔をしていると平気で書く。日本人の中には、こだわりのある人は少なくないはずだ。

大分以前に川上宗薫の小説を読んでいたら、見開きの頁に何カ所も朝鮮人を「朝鮮の人」と書いているので、異様に感じた。小説なのだから、アメリカ人、イギリス人、フランス人と同じように朝鮮人と書いてもおかしくない。

話は別だが、私はその本を紛失し、ここで書名を書くこともできない。そして、何故朝鮮の人なのか、という疑問は不明のままだったが、年月を経てそれが分かってきた。

宗薫は野球選手の張本勲とはピンポン野球の仲間で親しくしていた。ピンポン野球とは、卓球の硬球をプラスチック製のバットで打つ競技のことを言うらしい。これだけではイメージが湧いてこないが、私もよく知らないので説明できない。張本は東映から巨人に移籍して、故郷の広島での第一戦でカープファンから激しいヤジを浴びせられた。張本が球場に招いていた母が強いショックを受けた。その際、朝鮮人呼ばわりされた。野球の応援に何の関係もないはずだ。二人の間には原爆で家族を失ったという共通体験がある。川上宗薫は長崎の原爆で母と妹二人を亡くし、張本は広島の原爆で勤労奉仕に出ていた六歳年上の姉が犠牲になった。宗薫はそれ以外にも張本の苦労話を聞いて涙が止まらなかった。おそらくこの一件以来、朝鮮人と書いたり口にしたり出来なくなったのだろう。それしか考えられない。だから作品には、「朝鮮の人」と書かずには

いられなかったのだろう。繰り返すが見開きの頁に「朝鮮の人」と何度も書くのは異様で不自然である。そうは言うものの、文学にはたとえ原則を無視してでも書かずにはいられないことがあるものだ。それならそれでいいと、私は素直に肯定するようになった。